

[要旨]

ノスタルジアが自己連続性に与える影響

津村 健太

本研究では、過去に対する思慕の感情であるノスタルジアが一時的に低下した自己連続性を高めることができるか、検討した。自己連続性とは、過去から現在にかけて、同じ自分が連続している、という感覚である。ノスタルジアを感じる出来事の多くは、他者との相互作用や、人生の中の重要な出来事を含んでいる。また、ノスタルジアを感じる出来事は、現在とのつながりについて言及されることが多く、本当の自分を反映していると感じられる。そのため、ノスタルジアによって自己連続性が高められると考えられる。

実験1では、言語課題によって自己連続性の感覚を低下させた。言語課題には自己の連続性の低下を意味するような文章が含まれていた。課題の後、1回目の自己連続性測定を行った。続いて、参加者は映像を視聴した。ノスタルジア条件ではノスタルジア喚起音楽が、ポジティブ条件ではポジティブ感情喚起音楽がBGMとして用いられた。最後に、2回目の自己連続性測定が行われた。実験の結果、ノスタルジア条件の参加者は、音楽を聞く前よりも聞いた後の方が自己連続性が高くなっていた。他方で、ポジティブ条件の参加者では、そのような傾向は見られなかった。

実験2では、形が変化する幾何学図形を見せることで、自己の変化への知覚を高めた。図形を見た後、実験1と同様の映像を視聴した。そしてその後、自己連続性の測定を行った。実験の結果、ノスタルジア条件の参加者の方が、ポジティブ条件の参加者よりも、自己連続性が高くなっていた。

2つの実験から、ノスタルジアを感じると自己連続性が高まることが示唆された。しかし、2つの実験とも、自己連続性の低下が引き起こされていたのか確認できておらず、低下した自己連続性をノスタルジアによって高めることが出来るのかどうか、結果の解釈には慎重を期す必要があるだろう。